

関西大学審査学位論文

近世ロシアにおける外国人  
—新外国人村とその住民たち—  
(要約)

千葉 美保子

平成 26 年 3 月

本論文は、近世ロシア、とりわけ17世紀なかばのアレクセイ帝治世（1645-76年）における西欧出身者（以下外国人）たちの諸活動、またそれに伴うロシア社会での彼らの処遇の変化を通じて、ピョートル改革以前のロシア社会の諸相を明らかにすることを目的としている。

ロシア史研究では、ロシアの西欧化の過渡期として17世紀をとらえている。とりわけ、17世紀なかばのアレクセイ帝の治世においてピョートル改革のほとんどの土台が形作られていたことは通説となつて久しい。本論文では、この過渡期のロシア社会における外国人の諸活動、特に西方出身者の居住区として建設された「新外国人村」に焦点を当て、外側からの技術・文化の流入だけではなく、ロシアの「内側」からの西欧化の過程を探る。そして、これらの考察を踏まえ、「新外国人村」の果たした役割を検討し、アレクセイ帝の西欧化政策に対する再評価を試みた。

## 序論

序論では、本論文の背景、および研究史的な位置づけを、先行研究の整理を通じて論じた。

ロシアにおける西欧化の問題はすでに帝政ロシア時代より研究の対象とされており、帝政期の歴史学者たちは、アレクセイ帝治世に誕生した、「新外国人村」の持つ西欧化への意義を、ピョートル改革との関連のなかにおいて高く評価した。しかし、一方で、ソヴィエト期においては、ロシアの自主的な近代性の強調により、「新外国人村」は看過される傾向にあった。

ソヴィエト崩壊後の今日では、17世紀文書史料研究の発展を反映し、史料に基づいたより多面的なものへと変化し、活発な研究活動の高まりを見せている。この研究動向の中において、日本においても、17世紀のロシア社会に対する研究関心は高まりを見せている。

本論文では近年のロシア史研究の成果や新たな視点を加え、再度外国人村を見直すことを試み、検討を通じてアレクセイ帝の改革意識を問い直す。

## 第I部 外国人と外国人村

第I部では、中世から17世紀なかばまでのロシア社会における対外国人政策と、外国人たちの諸活動に着目した。

### 第1章 17世紀以前のロシア社会と外国人

まず第1章では、イヴァン3世から動乱期までの外国人の動向と外国人村の形成過程を通じて、ロシア社会と外国人の「接触」の歴史を通観した。この時代、ロシア政府はロシアを訪れた外国人の持つ能力に期待し、商人に対しては特権の付与という形で、また仕官者に対してはロシア人に比べ非常に多くの報酬という形で優遇する方針をとっていた。しかし一方でロシア社会と外国人たちとの混住から生まれる反発は逃れることのできない問題として常に横たわっていたのである。17世紀以前のロシア社会ではあくまでも外国人と長期間の密な接点を持つことがなかったのである。

### 第2章 17世紀前半における外国人

第2章では17世紀前半の外国人の活動を軍事・商業面に焦点をあて考察した。17世紀前半のあいだ外国人たちはモスクワ市内にある程度まとまって居住し、ロシア人たちと生活の空間を共有していた。この混住が聖職者による宗教的影響を訴える嘆願に発展したの

である。この嘆願行為を契機に、1649年に制定された『会議法典』においても彼らの居住地に対する制限が加えられ、以降外国人に対する圧力は強まる。そして、1652年、外国人たちはモスクワ郊外の特定の場所に移住することが命じられ、「新外国人村」が誕生した。

### 第3章 新外国人村の人口調査—『1665年人口調査簿』より—

第3章では1665年に行われた外国人村の人口調査（以下、『人口調査簿』）を題材にし、設立後10年余りを経た外国人村の実態を明らかにした。

まず、『人口調査簿』の作成経緯等をめぐる先行研究との比較検討を行い、『人口調査簿』に登録された約200戸の世帯について、その世帯主、同居人、使用人などその構成を詳らかにした。さらに、さまざまな事情から外国人村以外の場所に居住していた外国人たちの状況について考察し、ロシアに在住した外国人の全体像を描き出した。

### 第4章 新外国人村における住民たちの暮らしと争い

第4章では、新外国人村の景観の変化から、外国人村の発展と、その中で暮らす人々の自治の問題について考察した。住民たちの母国の慣習・文化は、共同体のなかで維持されていた。また、各々の慣習や文化は維持されていただけでなく、時代とともにロシア文化の流入と融合し、新外国人村独自の文化が形成されたのである。また、この文化の維持は彼らの自治の問題とも関係している。

彼らには一定の自治権も認められていた。しかし自治組織を有し、かつ政府からも秩序維持に関わる権限を与えられていたと考えられる新外国人村において、その秩序を保つために用いられたものは彼らの出身地の法的秩序や新外国人村独自の秩序ではなく、ロシア政府の法的秩序であった。つまり、新外国人村の自治組織とロシア政府が互いに譲歩する姿勢を持ちながら、どちらかの権限に偏るのではなく、均衡を保ち、各々で秩序維持の役割を担うことで、新外国人村の秩序は保たれていたのである。アレクセイ治世の絶対主義権力の下で、一定程度の自治が維持されていた事実は、注目に値する。

## 第II部 アレクセイ帝の眼差し

第II部では、アレクセイ帝と外国人たちの関係に焦点を当てつつ、アレクセイ帝のもとでの西欧化の進展と改革の動きを検討した。

### 第5章 17世紀後半における外国人たちの活躍

第5章では、アレクセイ帝の治世の諸相を通観し、アレクセイ帝治世において活躍した外国人たちの活動を考察した。第2章で述べたミハイル帝期における外国商人による工場経営をはじめとした商業活動、そしてスモレンスク戦争（1632-34年）を契機とした西欧出身者の大々的な登用は、アレクセイ帝の時代にもその連続性を見出すことができる。しかし、アレクセイ帝の時代には、外国人たちの世代を超えた一層活発な工場経営活動が見られ、また新外国人村で生まれ育ったロシア出身の外国人たちが、国政の原動力と成り得ていった。

### 第6章 アレクセイ帝の劇場—アレクセイ帝治世の文化政策—

第6章では、1672年から開始された演劇上演事業を通じて、アレクセイ帝の改革意識の考察を試みた。ロシア社会における音楽は、古くより「異教的」として排除される傾向に

あった。その担い手であるスコモローフに対する決定的な排除の意思は、アレクセイの時代で明確にされた。しかし一方で、ミハイル帝の時代には既に宮廷内では外国からやってきた楽師を受け入れている。スコモローフに対する強固な姿勢の反面、アレクセイもまた音楽、演劇に強い関心を示した。さらに、アレクセイ帝の治世後半においては、積極的な西欧文化の受容環境が整備されはじめていた。とりわけ注目すべきは、この演劇事業で中心となったのが、新外国人村をはじめとしたモスクワ在住の外国人たちであったことであろう。

アレクセイ帝の絶対主義の傾向は、序論や第5章において枢密官署の役割のなかで触れたが、この一見娯楽と捉えられる演劇上演事業においても、絶対主義への傾向をみるのが可能である。つまり、アレクセイ帝は演劇上演を通じ、フランス王権と同様に、権力を象徴し、またツァーリと臣下をつなぐ空間を形成しようとしていた可能性があった。この指摘に関しては、今後より多くの事例を分析することで、明らかになるだろう。

## 結論

序論において指摘したように、新外国人村の存在は、ピョートルの幼少期の出来事を中心に、その重要性が語られがちであり、さらに規模やモスクワ郊外という立地から、その影響力に関して疑問視する見解も存在する。

しかし、本論文で指摘したように、この新外国人村の住民の多くは、国家財政や軍を近代化するためにロシア政府によって雇用されていた仕官者たちであり、新外国人村の住民たちは、絶対権力の確立を目指すアレクセイ帝に、たとえば第6章で取り上げた劇場のように、新たな手段をもたらした。規模が小さく、存在期間も短く、中心部との距離も離れていたことを考慮しても、ロシア社会に大きな影響を与える潜在能力をもっていたのである。すでにアレクセイ治世には、新外国人村は外国人の生活の場としてだけではなく、時に使節団の滞在地として、時に産業の場として、そして時に演劇教育の場として、強い存在感を示していたのである。

また、第5章で明らかになったように、アレクセイ帝の治世後半は積極的な西欧文化・技術の受容環境が整備されはじめていた。かつての研究史上において、ピョートル改革の前提として、連続性を認められながらも、一方で常に中途半端で曖昧な状態に留まっていたとも指摘されたアレクセイ帝は、古来の慣習が残るロシア社会に配慮しながらも、西欧化と絶対主義という新たな傾向を明確に打ち出した、非常にバランスのとれたツァーリであり、西欧化・専制権力への意識はピョートル帝に匹敵するものだったのである。

以上